

# 青 雲



令和元年度  
第36号  
令和2年2月13日（木）  
日之影町立宮水小学校

## 町民のつどい ～ 意見発表を通して ～

3月9日（日）に宮水小学校の体育館で町民のつどいが行われました。その中で小中学生による意見発表がありました。宮水小学校を代表して6年生の工藤昌也君が発表しました。昌也君は「戦争をなくすために」という題で、修学旅行先の原爆資料館で目に留まった「焼き場に立つ少年」の写真から話を展開しました。

原稿を見ないで、とても立派な発表でした。あのようにはっきり覚えるのには、かなりの記憶力と努力が必要だと思います。私には到底無理です。冒頭でスクリーンの写真が写らなかったり、電灯の調整がうまくいかなかったりするアクシデントもありましたが、動揺することなく、発表をしっかりとやり遂げました。とても素晴らしい発表でした。裏面に「戦争をなくすために」の原稿を載せていますので、是非読んでみてください。



昌也君の意見発表

この原稿を見せてもらった頃、本屋に行ったらある雑誌にジョン・レノン生誕80年という見出しがありました。代表曲でもある「イマジン」という曲が、昌也君の意見内容と重なり、曲が頭の中に浮かんできました。

家庭教育学級開級式でお話をした詩人の長田 弘さんも思い出しました。亡くなる前日のインタビューで次のようなことを言っています。

「日常愛とは、生活様式への愛着です。大切な日常を崩壊させた戦争や災害の後、人は失われた日常に気付きます。平和とは日常を取り戻すことです。」

「戦争はこうして、私たちの生活様式を裏切ってきました。こういう確固とした日常への愛着を、まだずっと書き続けたかった。戦後70年の今、失われようとしているものがいかに大切かということを知りたい」

昌也君が書いているように、平底地区の高齢者の方々と交流する中で、おじいちゃんやおばあちゃんが、とてもあたたかく、笑顔で接してくれて、とても優しい気持ちになれたようなそんな日常が大切ではないかと思います。平凡な日常の中にある優しさや幸せな気持ちなどがほんとうは大切なのだと思います。昌也君の意見発表を通して、いろいろと考えさせられました。

## 令和元年度学習発表会 2月16日（日）

2月16日（日）は学習発表会です。是非、子どもたちの発表を見に来てください。

## 「戦争をなくすために」

宮水小 工藤 昌也

「何をしているのかな。」

修学旅行先の原爆資料館で、ぼくは、一枚の写真が目にとまりました。その写真に写っている男の子は、1歳くらいの赤ちゃんを背負って立っていました。その写真のタイトルは「焼き場に立つ少年」でした。ぼくは、解説を読んで驚きました。背中の弟はすでに死んでいたのです。この男の子は、背中に背負った弟を火葬する順番を待っているところだったのです。ぼくは、それを見てとてもかわいそうになりました。

日本で戦争があったということは知っていました。しかしぼくは、修学旅行や歴史の学習をとおして、戦争のおそろしさや、戦争中の日本国民のつらい様子を知り、とてもショックを受けました。

ぼくが一番ショックを受けたのは、ぼくたちと同じくらいの子どもたちも戦争に行かなければならなかったことです。戦争をするかしないかは、国のえらい人たちが決めていました。決めることのできなかった国民は、その犠牲になりました。なぜ、そんな大事なことをえらい人たちだけで決めるのかと、ぼくは腹が立ちました。戦争に行った人々はきっと、日本の勝利を信じて、死ぬ覚悟で戦場へ向かったと思います。しかし、やっぱりすごくこわかったろうし、家族と離れたくなくて、とてもつらく悲しい思いをしたと思います。今のぼくにはとても想像ができません。

ぼくは、1日3食おいしいごはんを食べることができます。毎日学校に行ってみんなと楽しく遊んだり勉強したりすることができます。大好きな家族7人で仲良く暮らしています。続けてきたソフトボールの練習も、たくさんできてうれしいです。ぼくは、こんな生活が「当たり前」だと思っていました。だけど戦争のことを知って、この生活が、どれだけ幸せなことなのかを実感しました。

日本はこの大きな戦争をきっかけに「戦争をしないこと」を決めました。ぼくは、社会の学習で、日本には「平和主義」という考え方があることを知り、日本の平和が守られるので安心だなと思いました。いつまでも続いてほしいです。

しかし世界中には、まだまだ戦争をしている国があります。戦争とは、人と人とが殺し合い、多くの命がなくなるおそろしいものです。ぼくは、どうして戦争をするのかと考えてみました。きっと、自分たちの利益のことだけを考え、周りの人を大切にする気持ちが少なくなったときに起きてしまうのではないかと思います。だからぼくは、一人一人が周りの人を思いやり、大切にする気持ちを忘れなければいいのではないかと考えました。そうすれば、優しさや幸せが人から人へどんどん広がって世界中の人々が毎日笑顔で過ごせる平和な世の中が実現できるのではないのでしょうか。

ぼくたちは先日、平底地区の高齢者の方々と交流しました。おじいちゃんおばあちゃんは、とてもあたたかく、笑顔で接してくださいました。ぼくもとても優しい気持ちになりました。

このように、優しさや幸せな気持ちは、やっぱり人に伝わっていくのだと思います。だからぼくも、周りにいる人に思いやりをもって接していきます。そして、祈ります。

1日も早く戦争がなくなりますように。

